

憂悲事也。

〔先哲叢談續編 六〕伊藤梅宇

梅宇尤長言語、講說經史、辭爽理暢、音節亮亮、還出於東涯之上、聽者敢無倦怠而欠伸者、

〔新撰字鏡 言 諺〕

士交市逢二反、擾口止志又口加留之、

〔同 品字樣〕嘉直治反、徒合徒立二反、利色也、不訥也、疾言也、加万々々志、

〔倭訓栞 中 編 六〕

くちかるし

新撰字鏡に諺をよめり、今もしかいへり、又くちとしともよめり、

〔運歩色葉集 葉 早 口 下〕

〔源氏物語 二 四 胡蝶〕

もの、たよりばかりのなをざりごとにくちとうこ、ろえたるも、さらでありぬべかりける、のちのなんとありぬべきわざなり、

〔源氏物語 四 十九 寄生〕

いざやいにしへの御ゆるしもなかりしことを、かうまでももらしきこゆるも、かつはいとくちかるけれど、下 略

訥辯

〔伊呂波字類抄 久 事 訥 クチツ、 略〕

〔三代實錄 四 十三 陽 成〕

元慶七年正月十五日壬午、從四位下行越前權守藤原朝臣弘經卒、中 略弘經天性

平生少言、重遲、語爲舌所介、礙澀於精談、

〔宇治拾遺物語 十 四 俊 弟 略〕

入道高階をのれは口てづ、にて、人のわらひ給中、ものがたりは、え侍ら

し、下 略

〔先哲叢談 四 伊藤長胤字原藏、號東涯、中 略〕

東涯音吐甚低、且訥訥如不能言、對門有箍桶匠、其篋束聲亂東涯講書、聽者每苦其難分、

〔先哲叢談續編 十一 内田頑石〕

頑石天資孝友、能事父兄、口訥不能言、終日端坐、與人語、

〔倭訓栞 中 編 六 久 編 六〕

くちおもし。徒然草に見ゆ、唐竇鞏、言若不出、世號囁囁翁と見えたり、

口おもし